

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ **法然寺をまるごと観る**

講師 玉岡 嘉尚、庵下 孝

(高松市観光ボランティアガイド)

日時 平成30年1月21日(日)



共催

高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

1 法然寺

法然寺は、建永二年（一二〇七）に御年七十五歳で四国に流された法然上人ゆかりの地、小松庄生福寺（現在のまんのう町に当たる）を、高松藩祖松平頼重公が高松に移し、復興して代々の菩提寺としました。

頼重公は、徳川家康公の孫であり、水戸の徳川光圀公の実兄に当たり、寛永十九年（一六四二）、二十一歳で高松十二万石の藩主となりました。法然上人を追慕して浄土宗に帰依し、寛文八年（一六六八）に法然寺の建立を始めました。同十年に法然寺が落慶すると、その三年後には隠居して龍雲軒源英と称しました。元禄八年（一六九五）、七十四歳で生涯を終え、来迎堂において葬儀が行われると、般若台の中央に葬られました。

法然寺は、仏生山来迎院法然寺と号され、その境域は、善導大師の二河白道に始まり、極楽浄土へ至る過程を示す伽藍配置となっています。また、釈迦の入滅を嘆き悲しむ様子を描いた涅槃図を、世にも稀なほぼ実物大の立体として再現した立体涅槃像群は、古来より「さぬきの寝釈迦」と親しまれてきました。さらに、来迎堂では、「仏が浄土から迎えにくる「来迎」の姿が、二十五菩薩全て立体彫刻で表現されており、こちらも大変珍しく、貴重なものとなっています。



2 見返地蔵堂（地蔵堂）

地蔵堂は、間口三間、奥行三間の小ぶりな堂で、石造の地蔵菩薩坐像が安置されています。

仏教では、人は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六つの世界（六道）を輪廻転生するといわれ、ここから解脱するためには日ごろの信仰が重要だと説いています。解脱をした先に仏のいる浄土があるとされています。

地蔵菩薩は、六道をめぐる苦しみ人々を導き救済する仏で、装飾の多い一般的な菩薩と違い、頭を丸め袈裟を着た修行僧のような姿をしているのが特徴です。

地蔵堂は、法然寺境内への入口である総門から道を挟んだ小高い場所に独立して建っています。総門をくぐった先からはあの世が表現されているため、総門前から地蔵堂を振り返り見る人々の姿が、死後、見知らぬ世界へ向かう不安やこの世への未練から振り返る様子に通じることから「見返地蔵」と呼ばれるようになったといわれています。



総門から振り返る

3 総門と二河白道

総門は、法然寺の表門にあたり、間口二間、奥行六尺、高さ一丈六尺ありま
す。この門は、「仏生山法然寺条目」（寛文十年「一六七〇」）、松平頼重が定め
た。全三十八箇条から成る。）の中では、「柵門（さくもん）」と記され、藩政
時代は、前に下馬札（乗馬のままでの通行を禁止した札）がありました。

総門をくぐると、燈籠が並ぶ参道が黒門まで続いています。この参道は、仏
教でいうところの「二河白道」に見立てて造られています。

「二河白道」とは、浄土教における極楽往生を願う信心の比喻のことで、現
世である東の岸（此岸）と極楽浄土のある西の岸（彼岸）の間には一本の細い
道（清純な信仰の道）があるとされます。そして、南には怒りの心を表す火の
河が、北にはむさぼる心を表す水の河が広がりますが、それらを恐れず信じる
道を渡れば、阿弥陀さまのもとへ辿りつけるという教えです。

総門をくぐり、黒門へと続く参道の右側には、水
の河に見立てた蓮池（今は埋め立てられ、小学校のグ
ラウンドになっている）が、左側には、火の河に見立
てた前池があります。総門をくぐったすぐ右手にある
十王堂で十王による裁きを受けた後、二河白道を渡
り、黒門から先に広がる極楽浄土へ辿りつくという配
置になっています。



二河白道の右手に見える蓮池
(現 仏生山小学校のグラウンド)



二河白道の左手に見える前池



4 十王堂

十王堂は、総門をくぐるとすぐ右手にある横長の建物で、閻魔大王以下、冥府において亡者たちの生前の罪を裁く十王及び奪衣婆（だつえぼ）が堂内に並んで睨みをきかせています。

十王の裁きは、死後の日数によって進み、初七日の秦広王（しんこうおう）、二十七日の初江王（しょこうおう）、三十七日の宋帝王（そうていおう）、四十七日の五官王（ごかんおう）、五十七日の閻魔王（えんまおう）、六十七日の変成王（へんじょうおう）を経て、七十七日（四十九日目）の泰山王（たいざんおう）が、六道の中から転生する先を選びます。七回の審理で決まらない場合は、百箇日の平等王（びやうどうおう）、一周忌の都市王（としおう）、三周忌の五道転輪王（ごどうてんりんおう）と、追加の審理が三回あります。遺族が追善供養を営むと罪は軽減され、救済されると信じられています。



閻魔王の像



十王堂内部

5 黒門、仁王門

黒門

古来より、この門から先が極楽浄土であるといわれ、特別な門とされてきたのが黒門です。ここからは、下乗（げじょう）といって駕籠（かご）から降りることとなっています。間口二間、奥行一間七尺、高さ一丈七尺。珍しい黒塗りであることが、黒門と呼ばれる所以です。しかし、昭和六十二年（一九八七）事故により倒壊し、以前の形式をもとに再建されました。

仁王門

黒門をくぐると、広庭と呼ばれる広大な空間が広がっています。藩主の葬儀をはじめとする重要な儀式がここで営まれてきました。そして、目の前には三つの門が見えます。向かって左側が仁王門、中央が涅槃門、右側が本堂門です。このうち、仁王門は、山上へと向かう門となっています。

仁王門は、間口五間、奥行三間、高さ二丈七尺。仁王門には阿形、吽形の迫力ある仁王（金剛力士）像が両脇に安置されています。仁王は、須弥山（この世にあつて、仏の住むあの世につながる山）の頂上、いわば仏界の入口にいる守護神、帝釈天（たいしやくてん）の化身です。帝釈天は、敵が現れたとき、武装して阿・吽の二つの顔を持って現れ、いずれも忿怒（ふんぬ）の相をしています。仁王がいれば、ここから先は仏の世界ということになります。法然寺の仁王像は、延宝二年（一六七四）に造られました。



6 五重塔

平成二十三年（二〇一一）は、法然上人八百年・親鸞聖人七五〇年大遠忌にあたることから、その記念事業として五重塔の建立が進められました。この法然上人没後八〇〇年にちなみ、塔の高さも壇上から八〇〇寸（二十四・二四メートル）となっています。

「法然寺古図」には、般若台北側に塔建立の予定地が描かれています。が、初代藩主頼重公の存命中には、この計画は叶いませんでした。以来、三〇〇年余の時を経て、ついに実現することとなりました。江戸時代の開山当時、仏生山山頂から見つかり、頼重公が五重塔に納めるべく寺に寄進した仏舎利塔は初層階の心柱の前に祀られています。

法然寺の五重塔は、古より受け継がれてきた木造伝統様式に構造解析などの現代技術を駆使した和様・総檜造・本瓦葺で、平安時代から続く伝統美を継承するおだやかな美しさが特徴です。

7 韓門跡及び四天王堂跡・二尊堂跡・鐘楼門

韓門跡（四天王堂跡）

仁王門を抜けると、万燈籠が参道両脇をびっしりと埋めています。お盆（八月十六日）と大晦日の年二回には、万燈籠を灯し、亡き人をお慰めする万灯会があります。そして、山上へ向かう参道石段は、西方の極楽浄土を目指しています。まず石段を数段上がると、かつて四天王像が安置されていた四天堂跡と韓門跡があります。四天王とは、東の持国天（じこくてん）、南の増長天（ぞうちょうてん）、西の広目天（こうもくてん）、北の多聞天（たもんてん）のことです。



仏の世界を守るため、人々の行いや善悪を監視し、逆らう
仏敵がいれば懲罰を加えます。

法然寺の韓門は、昭和十六年に老朽化により取り壊され、
今は礎石の一部がそのまま残っているのみとなっています。

二尊堂跡

二尊堂は、参道石段に続く伽藍のうち、最大のもので、右
に阿弥陀如来、左に釈迦如来が安置されていました。見上げ
れば土間の天井に飛天が、二尊の頭上には鳳凰が飛翔してい
ました。

しかしながら、二尊堂は、平成二十六年一月に焼失し、今
は韓門跡と同様、礎石から当時の姿を偲ぶほかなくなりまし
た。

鐘楼門

二尊堂跡から少し登ったところにある鐘楼門には、左右上
方に梵天と帝釈天が祀られています。梵天は古代インドの神
である雷神インドラが、帝釈天は宇宙の創造神ブラフマーが
ルーツで、共に仏教の守護神とされています。

そして、楼上には「平和の鐘」と呼ばれる梵鐘があります。
この鐘は、昭和二十四年（一九四九）に再鑄されたもので、
前の鐘は戦時中に供出されました。毎夕、この鐘の音が仏生
山に鳴り響きます。



8 来迎堂

石段を登りきると、来迎堂へ至ります。堂内へ足を踏み入れると、正面には、阿弥陀如来を中央に観音・勢至菩薩をはじめとする二十五菩薩が樂器を奏で、雲に乗り浄土から迎えに来る光景が立体彫刻で表されています。

総門から始まり、浄土を目指し参道を登ってきた参詣者は、ここで如来に迎えられ、極楽浄土へ旅立つという場面を体感することができます。このように、来迎の場面を立像で表現している例は少なく、貴重だとされています。

9 般若台

雄山ともいわれる仏生山の山頂一帯には、法然上人並びに歴代藩主（高松松平家）及び一族等の墓所があり、般若台と呼ばれています。普段は非公開として閉ざされていますが、藩主の命日には参拝が可能となります。なお、二代目藩主松平頼常、九代目藩主頼恕（よりひろ）の墓は志度の霊芝寺（れいしじ）にあり、十代目の頼胤（よりのたね）の墓は東京の伝通院にあります。

初代藩主松平頼重公は、この般若台を除く一山に、貴賤や宗派を問わずあらゆる人々の墓地を設けることを仏生山条目に定めています。このため、頂上には藩主家、その下に藩士や領民の墓というように、同じ寺の境内に墓が共存しています。

また、本来であれば、法然上人及び松平家一族しか葬られない般若台に、頼重公御逝去の際に殉死した家臣の高井角右衛門の墓や、九代藩主の奥方



初代藩主、松平頼重公の墓塔



倫姫（つねひめ）の墓の後ろには、忠義の犬として葬られた白犬の墓があるのも見所の一つです。

10 三仏堂（涅槃堂）

三仏堂は、阿弥陀如来坐像、釈迦如来坐像、弥勒菩薩坐像を本尊とするため、この名が付けられています。古くから「讃岐の寝釈迦」として知られる涅槃像があり、「涅槃堂」とも呼ばれています。

涅槃仏は、釈迦が入滅する様子を仏像で表したもので、身長にして二・七メートルもあります。涅槃図等によれば、釈迦は通常頭を北向き（北枕）で、顔は西向きとなつていますが、法然寺の寝釈迦は頭を南に向けています。

その釈迦を段上から見守るのが過去・現在・未来の三仏である阿弥陀如来坐像、釈迦如来坐像、弥勒菩薩坐像です。この三仏は、県の有形文化財に指定されています。寝釈迦のすぐ後ろには、悟りに至るまでの必要な知恵を司る文殊菩薩（もんじゅぼさつ）と、修行の面で釈迦を補助する普賢菩薩（ふげんぼさつ）、釈迦の弟子で如来となることが約束され、仏界の中でもこの世に近い浄土で修行をしている弥勒菩薩（みろくぼさつ）の像があります。

そして、十大弟子や悟りを開いた高僧である羅漢（らかん）が周囲を取り囲んでいます。奥には天龍八部衆（※）や、如来の化身とされ、憤怒の姿で現れる明王、仏教の行者を守護する神将らの眷属や鳥獣類の像もあり、釈迦の入滅を嘆き悲しむ様子が立体的に表現



されています。天井を見上げると、釈迦の母である摩耶夫人（まやぶにん）が、薬を持ち臨終に会いに来る姿が表現されており、何とか間に合わせようと薬を枕元に投下する行為が「投薬」として現在も使われています。

また、堂内の四隅には、持国天、増長天、広目天、多聞天の四天王像のほか、堂内を囲むように法然上人像や法然寺歴代住職の像が並んでいます。なお、法然寺では、宗派不問の納骨・分骨を受け付けており、本堂から三仏堂へ入る際に通る納骨堂には、遺骨で造られたお骨仏があります。

（※）天龍八部衆：・釈迦を守護する八神。八部衆とも。天、龍、夜叉、阿修羅、乾闥婆（けんだつば）、迦楼羅（か
らら）、緊那羅（きんなら）、摩睺羅伽（まごらか）を指します。

11 本堂

本堂は、明治四十年（一九〇七）に再建され、平成三年（一九九一）に改修されました。

本堂内の仏をまつる内陣には、法然上人が一刀入れるごとに三度礼拝して刻んだとされる自作の阿弥陀如来（本尊）があり、「法然上人一刀三礼の秘仏」ともいわれています。この他にも、法然上人が七十五歳の四国配流のときのお姿を写した波乗り上人像や、法然上人が師と仰いだ中国の浄土教祖師である善導大師像などがあります。



MEMO

参考文献

- 『仏生山来迎院 法然寺』 仏生山来迎院法然寺、平成二十八年
- 『仏生山 法然寺を訪れる』 仏生山地区コミュニティ協議会
- 『仏生山 歴史案内』 仏生山地区コミュニティ協議会、平成二十八年
- 『仏像とお寺の解剖図鑑』 スタジオワーク、平成二十八年

1月21日(日)復路

◆ことでん琴平線

(仏生山) (瓦町) (高松築港駅)
12:41発 → 12:53着 → 12:58 着

次回のふるさと探訪は…

テーマ 「亀水の百手祭(弓射)を見る」(予定)

とき 平成30年2月4日(日) 12:30~15:00頃

(※午後実施です。御注意ください)

集合場所 ことでん北坂バス停(予定)

(瓦町駅前3番乗り場) 11:15 → (北坂) 11:43

(高松駅2番乗り場) 11:45 → (北坂) 12:17



講師 立山 信浩 さん(『笠居郷探訪』著者)

参加費 無料

☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」1月15日号に開催案内を掲載しておりますので、御覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、

文化財課(TEL839-2660「午前10時30分~開始時間まで」)でお知らせします。(電話が通じない場合は、「実施」です。)

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気を
つけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。